

令和 2 年 7 月 9 日現在

機関番号：42302

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K18309

研究課題名(和文) 多数派集団である日本人幼児を対象にした多文化共生保育プログラムの開発と評価

研究課題名(英文) Development and Evaluation of Early Childhood Education Program for Japanese infants to develop multicultural perspectives

研究代表者

松尾 由美 (MATSUO, Yumi)

関東短期大学・こども学科・講師

研究者番号：50711628

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：絵本を使って多文化共生意識を育てる保育が多く行われている(研究2)が、先行研究ではその有効性は確認されていない(研究1)。その理由として幼児が大人も異民族・人種に対して否定的な態度を持つと誤解している可能性が指摘されている。そこで本研究では、大人が外集団成員との接触を明確に推奨する内容の絵本を制作し(研究3)、現役の保育者等にこの絵本の読み聞かせを子どもたちへしてもらい、評価を求めた(研究4)。その結果、子どもたちが絵本に夢中になった一方で、外国人との関わり方には変化が見られないという評価が得られた。今後、行動面だけでなく、子どもたちの多文化共生意識の変化について実証的に検討する必要がある。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、多数派集団に属する日本の幼児の多文化共生意識を育てるために、保育現場では絵本が多く活用されているものの、先行研究ではその有効性が確認されていないという課題を明らかにした。そこで、先行研究が指摘する子どもが持っていると思われる誤解(大人は外集団に対して否定的な態度を持つ)を解決するため、大人が外集団成員との接触を明確に推奨する内容の絵本を制作した。日本の子どもたちへの多文化共生保育への注目がほとんどなされてこなかった中で、現状と課題について問題提起し、有効性の検討に課題が残るものの、多文化共生意識を育てる新たな方法を提案した本研究は一定の意義はあるものと考えられる。

研究成果の概要(英文)：Only a few studies depict the efficacy of using picture books to develop multicultural perspectives among Japanese infants (Study 1), although, many childcare workers employ it (Study 2). Previous study demonstrates that infant often misunderstand adults who read them a story as biased toward outgroup members. In Study 3, the author made a picture book that narrates a story wherein parents of the main characters encourages them to make friends with the outgroup members. In Study 4, childcare workers were asked to read the picture book to the children and evaluate it. Results showed that children got engrossed in the picture book, however, they did not show any change in their interaction with foreign people. Further study should investigate whether reading a picture book instills multicultural perspectives and effectuates a change in children's attitude toward foreign people.

研究分野：社会心理学

キーワード：多文化共生保育 異文化理解

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

我が国における多文化共生保育に関する研究を概観したト田(2012)によれば、先行研究の多くは、園での多文化保育の現状や課題、マイノリティの子どもたちの園生活の様子、保育者の多文化保育に対する意識を明らかにしようとする実態調査が中心であり、より具体的な多文化共生保育の指導法の確立には至っていないという。保育者の主な関心は、少数派集団に属する外国にルーツを持つ子どもたちが適応的に園生活を送るにはどうしたらよいのかであり(例えば、安富,1993)、少数派集団の子どもの受け入れを課題としていた。

一方で、視覚的差異を持つマイノリティ集団に対する偏見は、3~6歳に始まる(Raabe & Beelmann, 2011)ため、幼児に対する異文化理解教育や介入等、何らかの対策を講じる必要がある。8歳以下の子どもに対して行われた偏見低減、異文化理解の深化を目的とする介入をシステムティックレビューしたAboud et al.(2012)では、多数派集団の子どもたちに対する介入が有効であることが示されている。

以上の議論から、幼児に対する何らかの異文化理解教育は必要であるとされるものの、我が国において多数派集団に属する日本の子どもたちへの多文化共生保育の手法は確立されていないのが現状である。

2. 研究の目的

上述の通り、これまでの我が国における多文化共生保育はマイノリティ集団に属する外国にルーツを持つ子どもたちを園でどのように受け入れるかに関心が集中しており、多数派集団に属する日本の子どもたちへの多文化共生保育の手法は確立されていない。そこで、多数派集団の日本の子どもたちを対象に異文化理解、外国の人に対する肯定的な態度を育むことを目的とする多文化共生保育プログラムを開発・評価することを、本研究課題の申請時における目的とした。

3. 研究の方法

本研究は、多文化共生保育プログラムを開発するために、4つの研究を実施した。研究1では、研究動向を確認するため、幼児を対象にした異文化理解や外集団成員に対する友好的態度を育てる取り組みの中でも、接触仮説に基づきその有効性を検討した先行研究のレビューを行った。研究2では、多文化共生保育の実態を把握するため、現役の保育者を対象に質問紙調査を行い、日本の子どもたちの国際理解・多文化共生意識を高めるために行われている現場での取り組み状況等について尋ねた。研究3では、研究1、2で得られた研究知見に基づき、子どもたちの多文化共生意識を高めることを目指した絵本を制作した。研究4では、現役保育者等に制作した絵本の読み聞かせを子どもたちに行ってもらい、絵本に対する評価を質問紙調査によって求めた。

(1) 研究1 幼児を対象にした外集団への偏見低減・友好性向上に関する接触仮説研究の概括

多数派集団に属する日本の子どもたちが外国の人に対する理解や肯定的態度を深めるためには、どのような教育・介入が有効であるのかを検討するため先行研究を概括した。特に、幼児が、異なる国籍・民族の人と直接あるいは映像や物語を通して接触する取り組みに着目し、その有効性を実証的に検討した研究に着目した。

(2) 研究2 多数派集団の乳幼児を対象とする多文化共生保育の実態調査

調査対象者と調査時期

2018年8月に実施された幼稚園教諭及び小学校教諭を対象にした教員免許状更新講習において、さまざまな背景を持つ子どもの言葉の学びの支援に関する選択科目を受講した84名に調査を依頼した。84名の受講者中83名から研究協力の同意を得られた。さらに、現在、幼稚園・保育所(園)、認定こども園、小学校に勤めていないと回答した1名と、これまでに幼稚園・保育所(園)、認定こども園に勤めたことがあると回答しなかった12名(うち無回答3名)を除いた70名を本研究の分析対象とした。

調査項目

回答者の保育者としての勤務年数、勤務先の校種、担当学年、勤務先での外国にルーツを持つ園児・児童の在籍状況に加え、以下の項目を尋ねた。

・多文化共生保育の現状

：日本の子どもを対象に国際理解・多文化共生の意識を高めるために、「様々な国や民族の言葉に触れる機会」、「様々な国や民族の文化に触れる機会」、「様々な国や民族の人に対して互いの違いを認め尊重し合う友好的な態度を育てたり、平等意識を育てる機会」、を設けているかどうかを「ある」、「なし」の2件法で尋ねた。

・日本の子どもたちと外国にルーツのある人達との関係で気がかりなこと等

：回答者自身が担当するクラスの日本の子どもたちと外国にルーツのある人たちとの関係において気になることや、それに対する園や学校での対策や保育者・教員として心掛けていることについて、自由に記述するように求めた。

(3) 研究3 Allport の接触仮説に有効な条件を取り入れた絵本の制作

研究1ならびに研究2で得られた研究成果に基づき、絵本を制作することとした。研究代表者が絵本のストーリーを考え、挿絵は研究協力者の協力を得て制作された。制作の途中段階において、幼児教育の専門家の助言を参考に改良を加えた。

(4) 研究 4 現役保育者等を対象にした絵本の評価のための調査

調査対象者と調査時期

2020年2月保育者養成校の卒業生を対象に開催された行事に来校した現役保育者及び放課後児童支援員を対象に研究への協力を依頼した。加えて、保育者養成校の教員を通じて、直接、保育者に依頼を行った。調査への協力の同意が得られた55名に対して、研究3で制作した絵本、調査用紙、返信用封筒の一式を渡し、勤務先の園で子どもたちの前で絵本の読み聞かせを行い、調査用紙に回答するように求めた。同年3月末までに調査用紙を返送した25名を分析の対象とした。

調査項目

回答者の保育者としての勤務年数、読み聞かせを行った状況、読み聞かせの対象となった子どもの学年や人数、子どもが園内で外国にルーツを持つ人と接する機会に加え、以下の項目について尋ねた。

・読み聞かせの間の子どもの様子

：読み聞かせの間の子どもの様子について、内容を理解している、夢中になっている、飽きている、理解するのが難しい、楽しんでいる、の5項目について、「5:かなりあてはまる」から「1:まったくあてはまらない」までの5件法で回答を求めた。

・読み聞かせを行った後の子どもの様子

：読み聞かせを行った後、子どもたちの人との関わり方や多文化共生意識に変化が見られたかどうかについて、普段遊ぶことが少ない同じクラスの友達と一緒に過ごす、普段遊ぶことが少ない違うクラスや学年の友達と一緒に過ごす、外国にルーツを持つ人との関わり方が変わった、お友達といざこざが起きた時の対処法が変わった、外国や外国にルーツを持つ人に対する興味関心が高まった、の5項目について、「5:かなりあてはまる」から「1:まったくあてはまらない」までの5件法で回答を求めた。

以上に加えて、「読み聞かせを始める前や終わった後にどのようなことを子どもたちに話したか」、「読み聞かせの間の子どもの具体的な様子」、「読み聞かせの際に工夫したこと」、「読み聞かせを行った後の子どもたちの他の人との関わり方や多文化共生意識に対する具体的な変化」、「絵本の改善点」について自由記述で回答を求めた。

4. 研究成果

(1) 幼児を対象にした外集団への偏見低減・友好性向上に関する接触仮説研究の概括

社会心理学では、Allport(1954)以来、異なる集団に属するメンバー同士が接する集団間接触が自分とは異なる外集団に対する肯定的な態度の育成や偏見低減に極めて有効であるという接触仮説(contact hypothesis)が様々な研究において示されてきた。本研究では、幼児を対象にした接触仮説に関する研究について、直接接触による効果、映像を介した接触の効果、物語を介した接触の効果、の3つの観点でレビューを行った。

直接接触による効果を検討した研究の概括

幼児を対象にした研究はそれほど多くはないものの、幼児においても自分とは異なる人種・民族の子どもと接することで、異なる人種・民族に対するステレオタイプやバイアスの改善、友情関係の形成が見られ、接触仮説が有効であることが示唆された。

映像を介した接触の効果を検討した研究の概括

先行研究において、直接外集団成員と接しなくても自分と同じ内集団成員が外集団成員と接触する場面を目撃すること(代理接触:vicarious contact)が偏見低減に有効であることが示されている。幼児においてもこのような効果が見られるか、様々な人種・民族的背景を持つ人物が登場するセサミストリート等、テレビ番組の視聴による効果を検討した研究を概括した。その結果、同じ番組を視聴しても、民族によって効果が異なる研究(Cole et al. (2003); Fluent Public Opinion & Market Research, 2008)等、研究知見が一貫していない状況が見られた。

物語を介した接触の効果を検討した研究の概括

幼児を対象にした物語を用いた代理接触は、その有効性を示す研究がほとんど見当たらない状況であった。Johnson & Aboud (2017)は、映像を介した介入も含めメディアを通じた代理接触は6歳以下の子どもではほとんど有効性が確認されないことを指摘している。その理由として、幼児は物語を読み聞かせる大人も自分と同じように外集団に対してバイアスを持っていると考えることにより、物語に描かれるアンチバイアスメッセージを曲解している可能性を示唆している。

(2) 研究 2 多数派集団の乳幼児を対象とする多文化共生保育の実態調査

園で日本の乳幼児が様々な国や民族の言葉に触れる取り組み

「外部講師から英語を学ぶ」機会を設けているという回答が半数以上(62.86%)と多い。一方で、外国にルーツを持つ在園児の母語をほかの日本の子どもたちが学ぶ機会は限られていることが示された。

園で日本の乳幼児が様々な国や民族の文化に触れる取り組み

「保育・教育の中に、外国や他民族の遊び・行事・食事を取り入れ、外国・多民族の文化について学ぶ」機会を設けていると回答した人が9名と最も多かった。保育所保育指針解説(厚生労働省, 2018)では、多文化共生保育の例として、「外国籍の保護者に自国の文化に関する話をしてもらったり、遊びや料理を紹介してもらったりすることなどを挙げているが、「保護者からその国や民族の文化を学ぶ機会」を設けていると回答した人はいなかった。

園で日本の乳幼児の多文化共生意識を育てる機会

「自分とは異なる国籍や民族の人と仲良く遊んだり交流する主人公が登場する絵本や本を先生が紹

介する」機会を設けていると回答した人が 25 名と最も多かった(35.71%)。

(3) 研究 3 Allport の接触仮説に有効な条件を取り入れた絵本の制作

研究 2 の調査結果により、現場では絵本を活用した多文化共生意識を育てるための試みが比較的多く行われていることが示された。その一方で、研究 1 で行った先行研究のレビューによれば、絵本による異文化共生意識を高める効果は確認されていない。その理由として、Johnson & Aboud (2017)は幼児が物語を読み聞かせる大人も自分と同じように外集団に対してバイアスを持っていると誤解している可能性を指摘している。Allport(1954)は、異なる集団が接触する際、いくつかの条件を満たす必要があるとしており、その条件の一つとして制度的支持(法律や権威者によって接触することが推奨されている)を挙げている。物語内で制度的支持を明確にすることで、Johnson & Aboud (2017)が指摘したような子どもたちの持つ誤解を解消することが期待される。しかし、これまでの幼児を対象にした研究ではこの Allport が提案した条件(互いの対等な地位、 互いに共通する目標、 共通目標を達成するための協力、 接触に対する制度的支持)を物語に意図的に取り入れたものは見当たらない。そこで研究 3 では、Allport が主張した接触仮説に有効に働く条件を物語に取り入れた絵本を制作した。地球ではない星に住む 2 つの種族の子どもそれぞれが主人公として登場し、最初は遊ぶ場所をめぐるいさかきがあり不仲であるが、主人公の親が互いに仲良くするよう促したり、解決に互いの存在が必要な共通の問題に取り組んだりすることで、友好的関係が築かれるというストーリーであった。架空の星の種族を主人公にすることで、特定の民族・国の人とだけでなく、自分とは異なる集団の人々全般に対する共生意識を高めることをねらいとした。

(4) 研究 4 現役保育者等を対象にした絵本の評価のための調査

読み聞かせの対象となった子どもたちについて

読み聞かせを行った子どもたちの学年について尋ねたところ、年中児・年長児に行ったと回答した人が、それぞれ 13 名、11 名であり、多い傾向にあった。詳細を表 1 に示す。なお、複数の学年の子どもたちの前で読み聞かせを行ったケースもあるため回答は複数回答となっている。

また、読み聞かせを行った際の子どもたちの人数について、最も少ない人数で 5 名、最も多い人数で 40 名であり、平均すると 22.6 名であった。

表 1 読み聞かせを行った子どもたちの学年について回答した人数

子どもの学年	2 歳児	年少児	年中児	年長児	小学生
回答者の人数	1	2	13	11	3

読み聞かせの間の子どもの様子

「読み聞かせに夢中になっている姿が見られた」に「かなりあてはまる(10 名)」「少しあてはまる(13 名)」と回答した人が 8 割を超えていた。読み聞かせの間の子どもの様子について具体的に尋ねた自由記述の内容でも「興味深げに、前のめりになって聞いていた。」「絵本の絵に食い入るように見ていた。」との記述があり、絵本の読み聞かせに子どもたちが集中している様子がうかがえる。

一方で、「絵本の内容を理解している姿が見られた」かについては、「かなりあてはまる(8 名)」「少しあてはまる(8 名)」を合わせても約 6 割であった。自由記述の内容においても、「話の内容を頭の中で考えているように見えた。」「しっかり話を聞きながら内容を理解しようとしている」という記述がある一方で、「登場キャラクターが増えてきたあたりからだんだん集中が切れてきた」「年中は最初は良く見ていたが、途中から飽きて友だちと話をする子が数名いた。飽きている子は、「よくわからないね。」等と口にする姿が見られた。」という記述もあり、幼児にとってストーリーの理解が難しいという評価が得られた。絵本の改善点に関する自由記述においても「キャラ(クター)が似ているので、片方は宇宙から来たとか、見た目が違うとか、子どもたちも分かりやすい違いがあると”自分とは違う人々”とも仲良くできるんだと考えながら見れるのかなと思いました。」「生き物のイラストを変える。(色だけだと別の地域や種というのが分かりづらい)」とキャラクターの設定をよりわかりやすく区別がつくようにすることや、「ストーリーをシンプルに分かり易く。」「短く内容をまとめる。少し長く感じた。」といったストーリーを単純に短くすることが改善点として挙げられていた。また、「身近な出来事でありそうなことを内容にする。」「子ども自身が、主人公になりきれるようなストーリーにするともっと夢中になれると思いました。」のように子どもたちが自分のことに置き換えて考えやすいストーリーにすることについても、複数の回答者から改善点として指摘された。

読み聞かせ後の子どもたちの変化

「お友達といざこざが起きた時の対処方法が変わった」に「かなりあてはまる」と回答した人はいなかったものの、「少しあてはまる(12 名)」と回答した人の割合は 46.15%であり、読み聞かせ後に子どもたちの人との関わり方にやや変化の兆しがあったと評価されていることが見てとれる。読み聞かせ後の子どもたちの他の人との関わり方に関する具体的な変化について、「遊びの中で喧嘩が起きた時「仲良く遊ぶんだよ」と絵本を読んだ後だったからか、言っている子がいた。」「(読み聞かせ後)けんかをしてしまうと嫌な気持ちになり、楽しく遊べないので、話し合っって仲よく遊べるようにしたいと話していた。」という自由

記述での回答が見られた。お友達と仲良く遊ぶということについては、日ごろの保育の中でも繰り返し様々な場面において指導が行われており、今回の絵本の読み聞かせのみによって、このような姿が見られたとは言えないだろう。しかし、絵本をきっかけに、子どもたちの中でけんかをせず仲良く遊ぶという気持ちを再認識した様子が見られる。

一方で、「外国や外国にルーツを持つ人に対する興味関心が高まった」「外国にルーツを持つ人との関わり方が変わった」という問いに対して、「少しあてはまる」と回答した人はそれぞれ3名、2名であり、「かなりあてはまる」と回答した人はどちらの項目でも0名であった。今回の絵本が外国にルーツのある人との関わり方や興味関心につながらなかった理由として、「内容に外国のルーツを持つ人の内容がないので、外国にルーツを持つ人という事にむすびつかないと思う。」『導入やまとめでこちらから外国に触れなければ、この本から子ども達が外国をイメージすることは難しいと思う。』といった自由記述の回答から読み取れるように、今回の絵本の題材が直接的に外国にルーツのある人と日本の子どもとの関係を描いていなかったため、子どもたちには外国にルーツがある人とも仲良くしようというメッセージが伝わらなかったと考えられる。その一方で、読み聞かせの後に、「どんな子にも良いところがあるって絵本で見たよね。皆が小学校へ入学すると、ここの園の子以外にも沢山のお友達がいるから、その子たちの良いところも見つけて、お友達を沢山作ってくださいね。」や、「もうすぐ卒園するので、小学校に行ったら今よりもっと色々な人がいて自分の考えている事と違う事を言うお友達がいったり、もしかしたらぶつかり合うこともあると思うけど、力を合わせたり、受け入れてあげられるようになると一緒に楽しく過ごせるようになるよね...など」と話したという自由記述にもあるように、外国にルーツのある人ととらわれず、異なる園出身の人と接する小学校入学後のことについて話を発展させ、自分とは異なる集団の人たちとの関わり方全般について考えるきっかけとしたという回答も見られた。

(5) 本研究の主な成果と今後の課題

本研究の主な成果と国内外における位置づけとインパクト

本研究では、多数派集団に属する日本の幼児の多文化共生意識を育てるために、保育現場では絵本が多く活用されているものの、先行研究ではその有効性が確認されていないという課題を明らかにした。そこで、先行研究が指摘する大人も自身と同じように外集団に対して否定的な態度を持つと誤解している可能性があるという問題を解決するため、大人が外集団成員との接触を明確に推奨する内容の絵本を制作し、現役保育者等に評価を求めた。日本の子どもたちへの多文化共生保育への注目がほとんどなされてこなかった中で、現状を明らかにし、その課題について問題提起した上で、その課題を克服しようと新たな取り組みを提案した本研究は一定の意義があると言えるだろう。

今後の課題と展望

本研究で提案した絵本を活用した方法は有効性の検討に課題が残る。読み聞かせを行った保育者等への調査から、子どもたちが読み聞かせに夢中になり楽しむ姿が見られたという評価がある一方で、子どもたちにとって身近で具体的なストーリーでなかったため多文化共生意識を育てるまでには至らないという評価も得られた。本研究で制作した絵本では、子どもたちがどの国・民族の人に対しても共生意識を持つことができるように、特定の国・民族の人との関係を具体的に描くのではなく、架空の星の種族を主人公にした。しかし、幼児自身が物語の内容を他の例に般化させることは難しく、読み聞かせ後、保育者がどのように子どもたちに語りかけをすれば効果が高まるのか等、保育の中で絵本をどのように活用すれば有効性が高まるのか検討する必要がある。さらに、絵本の読み聞かせ後に子どもたちの多文化共生意識に変化が見られるかどうか実証的に検討することが必要である。

<引用文献>

- Aboud, F. E., Tredoux, C., Tropp, L. R., Brown, C. S., Niens, U., & Noor, N. M. (2012). Interventions to reduce prejudice and enhance inclusion and respect for ethnic differences in early childhood: A systematic review *Developmental Review*, 32(4), 307-336.
- Allport, G. W. (1954). *The nature of prejudice*. Cambridge, MA: Addison-Wisley. (オルポート, G.W. 原谷 達夫・野村 昭 (翻訳) (1968). *偏見の心理* 東京: 培風館)
- Cole, C. F et al. (2003) The educational impact of Rechov Sumsum/ Shara`a Simsim: A Sesame Street television series to promote respect and understanding among children living in Israel, the West Bank, and Gaza. *International Journal of Behavioral Development*, 27(5), 409-422.
- Fluent Public Opinion & Market Research (2008). *Assessment of Educational Impact of Ruga Sesam and Ulica Sezam in Kosovo: Report of findings*. New York, NY: Fluent. Retrieved from http://downloads.cdn.sesame.org/sw/SWorg/documents/FullKosovoReport_Jan+2008.pdf (June 19, 2020)
- Johnson P. J. & Aboud, F. E. (2017). Evaluation of an intervention using cross-race friend story books to reduce prejudice among majority race young children *Early Childhood Research Quarterly*, 40, 110-122.
- ト田真一郎 (2012). 日本における多文化共生保育研究の動向 エデュケア(大阪教育大学幼児教育学研究室紀要), 33, 13-33.
- 安富 利光・阿部 真美子・池田 政子 (1993). 山梨県の保育における国際児の受け入れについて : 多文化教育・保育の研究(1)山梨県立女子短期大学紀要 26, 125-164.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 松尾由美	4. 巻 61
2. 論文標題 多数派集団の乳幼児を対象とする多文化共生保育の実態	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 関東短期大学紀要	6. 最初と最後の頁 1-8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 松尾由美	4. 巻 60
2. 論文標題 多数派集団の幼児を対象とする多文化共生保育の有効性を高めるには？ 幼児を対象にした外集団に対する偏見低減・友好性向上に関する研究の概括	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 関東短期大学紀要	6. 最初と最後の頁 50-60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----